

一、次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

「僕」(松岡清澄)は、祖母の影響で手芸や刺繍を趣味にしていた。中学時代にその趣味をからかわれたことがきっかけで同級生から浮いてしまい、友だちを作ることができず、家族から心配されていた。高校入学後は、すぐ後ろの席だった宮多に話しかけられるようになり、彼のグループに入ることができた。そのことを祖母は喜んでくれた。

昼休みの教室には、机をくつつけたいくつもの鳥ができていた。大陸と呼びたいような大所帯もある。中学の給食の時間とは違う。めいめい仲の良い相手と昼食をともにすることができている。

入学式から半月以上過ぎた。僕は教卓の近くの、机みつつ分の鳥にいる。宮多を中心とする、五人組のグループだ。宮多たちは、にゃんこなんとかという僕の知らないスマホゲームの話で盛り上がり上がっている。猫のキャラクターがたくさん出てきて戦うのだという。ゲームをする習慣がないから、意味がよくわからない。さつきからぜんぜん会話に入れない。課金とかログインボーナスという単語が飛び交っている。もう、相槌すら打てなくなってきた。

祖母の顔を思い出して、懸命に話についていこうとした。だって友だちがいないのは、よくないことなのだ。家族に心配されるようなことなのだから。

「なあ、松岡くんは」

宮多の話す声が、途中で聞こえなくなつた。ふいに高杉くるみが視界に入ったから。

世界地図なら、砂粒ほどのサイズで描かれる孤島。そこに彼女はいた。箸でつまんだたまごやきを口に運んでいる。唇の両端がきゅつと持ち上がった。虚勢を張るわけでもなく、おどおどするでもなく、たまごやきを味わっている。その顔を見た瞬間「ごめん」と口走っていた。

「え」

「ごめん。俺、見たい本あるから席に戻るわ」

ぽかんと口を開ける宮多たちに、背を向ける。

図書室で借りた、世界各国の民族衣装に施された刺繍を集めた本を開く。宮多たちがこの本に興味を示すとは到底思えない。わかってもらえるわけがない。ほんとうは「明治の刺繍絵画名品集」というぶあつい図録がよかった。残念ながらそこらは貸出禁止になっていたのだ。どのように糸を重ねてあるか、食い入るように眺める。ここはこうなって、こうなって。勝手に指が動く。

ふと顔を上げると、近くにいた数名がこつちを見ていた。男女混合の四人グループのうちのひとりが僕の手つきを真似て、くすくす笑っている。

「なに？」

自分で思っていたより、大きな声が出た。他の鳥の生徒たちが気づいて、こちらに注目しているのがわかった。宮多たちも。でももう、あとには引けない。

「なあ、なんか用？」

まさか話しかけられるとは思っていなかったのか、ひとりがぎよつとしたように目を見開く。その隣の男子が「は？なんなん」と頬をひきつらせた。

「いや、なんなん？ そつちこそ」

べつに。なあ。うん。彼らはもごもごと言ひ合ひ、視線を逸らす。教室に、ざわめきが戻る。遠くで交わされるひそやかなささやきや笑い声が、耳たぶをちりつと掠めた。

校門を出たところでキヨくん、と呼ばれた。振り返ったその瞬間に、強い風が吹く。

キヨくん。小学校低学年の頃のままだに、高杉くるみは僕の名を呼ぶ。当時は僕も彼女を「くるみちゃん」と親しげな感じで呼んでいたのだが、学年が上がるにつれて会話の機会が減り、今ではもうどう呼べばいいのかわからない。

「高杉さん。くるみさん。どつちで呼んだらええかな？」

「どつちでも」

名字が高杉というだけで塾の子らに「晋作」と呼ばれていた時期があつて嫌だった、なので晋作でなければ、なんと呼

ばれても構わないらしい。

「高杉晋作、嫌いなん？」

「嫌いじゃないけど、もうちょい長生きしたいやん」

「なるほど。じゃあ……くるみさん、かな」

歩いていると、グラウンドの野球部やサッカー部の声がどんどん遠くなっていく。今日は世界がうつすらと黄色くて、遠くの山がぼやけて見えた。春はいつもそうだ。すべての輪郭がいまいになる。

「あんまり気にせんほうがええよ。山田くんたちのことは」

「山田って誰？」

僕の手つきを真似て笑っていたのが山田某らしい。

「私らと同じ中学やったで」

「覚えてない」

⁵個性は大事、というようなことを人はよく言うが、学校以上に「個性を尊重すること、伸ばすこと」に向いていない場所は、たぶんない。柴犬の群れに交じったナポリタン・マスティフ。あるいはポメラニアン。集団の中でもてはやされる個性なんて、せいぜいその程度のものだ。犬の集団にアヒルが入ってきたら、あつかいに困る。

アヒルはアヒルの群れに交じれば見分けがつかなくなる。その程度のめずらしさであっても、学校ではもてあまされる。浮く。くすくす笑いながら仕草を真似される。

「だいじょうぶ。慣れるし」

けど、お気遣いありがとう。そう言っ隣を見たら、くるみはいなかった。数メートル後方でしゃがんでいる。灰色の石をつまみあげて、しげしげと観察しはじめた。

「なにしてんの？」

「うん、石」

うん、石。ぜんぜん答えになってない。入学式の日「石が好き」だと言っていたことはもちろんちゃんと覚えていたが、

まさか道端の石を拾っているとは思わなかった。

「いつも石拾ってんの？ 帰る時に」

「いつもではないよ。だいたい土日にかがしに行く。河原とか、山に」

「土日にか？ わざわざ？」

「やすりで磨くの。つるつるのぴかぴかになるまで」

放課後の時間はすべて石の研磨にあてているという。ほんまにきれいになんねんで、と言う頬がかすかに上気している。ポケットから取り出して見せられた石は三角のおにぎりのような形状だった。たしかによく磨かれている。触ってもええよ、と言われて、手を伸ばした。指先で、しばらくすべすべとした感触を楽しむ。

「さっき拾った石も磨くの？」

くるみはすこし考えて、これはたぶん磨かへん、と答えた。

「磨かれたくない石もあるから。つるつるのぴかぴかになりたくないってこの石が言うてる」

石には石の意思がある。駄洒落のようなことを真顔で言うが、意味がわからない。

「石の意思、わかんの？」

「わかりたい、いつも思ってる。それに、ぴかぴかしてないときれいじゃないってわけでもないやんか。ごつごつのざらざらの石のきれいさってあるから。そこは尊重してやらんとな」

じゃあね。その挨拶があまりに唐突でそっけなかったので、怒ったのかと一瞬焦った。

「キヨくん、まっすぐやる。私、こっちやから」

川沿いの道を一步踏み出してから振り返った。⁶ずんずんと前進していくくるみの後ろ姿は、巨大なリュックが移動しているように見えた。

石を磨くのが楽しいという話も、石の意思という話も、よくわからなかった。わからなくて、おもしろい。わからないことに触れるということ。似たもの同士で「わかるわかる」と言い合うより、そのほうが楽しい。

ポケットの中でスマートフォンが鳴って、宮多からのメッセージが表示された。

「昼、なんか怒ってた？　もしか俺あかんこと言うた？」

7 違う。声に出して言いそうになる。宮多はなにも悪いことをしていない。ただ僕があの時、気づいてしまっただけ。自分が楽しいふりをしていることに。

いつも、ひとりだった。

教科書を忘れた時に気軽に借りる相手がないのは、心もとない。ひとりではつんと弁当を食べるのは、わびしい。でもさびしさをごまかすために、自分の好きなことを好きではないふりをするのは、好きではないことを好きなふりをするのは、もっともつとさびしい。

8 好きなものを追いかけることは、楽しいと同時にとても苦しい。その苦しさに耐える覚悟が、僕にはあるのか。文字を入力する指がひどく震える。

「ちやうねん。ほんまに本読みたかっただけ。刺繍の本」

ポケットからハンカチを取り出した。祖母に褒められた猫の刺繍を撮影して送った。すぐに既読の通知がつく。

「こうやって刺繍するのが趣味で、ゲームとかほんまはぜんぜん興味なくて、自分の席に戻りたかった。ごめん」
ポケットにスマートフォンをつっこんだ。数歩歩いたところで、またスマートフォンが鳴った。

「え、めつちやうまいやん。松岡くんすごいな」

そのメッセージを、何度も繰り返し読んだ。

わかってもらえるわけがない。どうして勝手にそう思いこんでいたのだろう。

今まで出会ってきた人間が、みんなそうだったから。だとしても、宮多は彼らではないのに。

いつのまにか、また靴紐がほどけていた。しゃがんだ瞬間、川で魚がばしゃんと跳ねた。波紋が幾重にも広がる。太陽の光を受けた川の水面が風で波打つ。まぶしさに目の奥が痛くなって、じんわりと涙が滲む。

きらめくもの。揺らめくもの。目に見えていても、かたちのないものには触れられない。すくいとって保管することはできない。太陽が翳ればたちまち消え失せる。だからこそ美しいのだとわかっていても、願う。布の上で、あれを再現できない。そうすれば指で触れてたしかめられる。身にまとうことだって。そういうドレスをつくりたい。着てほしい。すべ

てのものを「無理」と遠ざける姉にこそ。きらめくもの。揺らめくもの。どうせ触れられないのだから、なんてあきらめる必要などない。無理なんかじゃないから、ぜったい。

どんな布を、どんなかたちに裁断して、どんな装飾をほどこせばいいのか。それを考えはじめたら、いてもたってもいられなくなる。

それから、明日。明日、学校に行ったら、宮多に例のにゃんこなんかというゲームのことを、教えてもらおう。好きじゃないものを好きなふりをする必要はない。でも僕はまだ宮多たちのことをよく知らない。知ろうともしていなかった。

9 靴紐をきつく締め直して、歩く速度をはやめる。

(寺地はるな「水を縫う」)

② ナポリタン・マステイフ。あるいはポメラニアン：犬の種類の名前。

そういうドレス：「僕」が手作りすると約束した、姉が結婚式で着るドレス。

問一 ——線部1——もう、相槌すら打てなくなってきた」とあるが、この時の「僕」の気持ちの説明として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 宮多たちは楽しそうに話しているのに、自分だけ会話についていくことができず、これ以上楽しいふりをすることに後ろめたさを感じている。

イ 友だちを作りたいと強く望んでいるのに、宮多たちの話を聞いているだけで積極的に話しかけようとしないう自分を情けなく思い、気持ちが悪んでいる。

ウ 友だちを作らなければならないと思っているのに、宮多たちの会話に入れないうまま自分だけが取り残されていき、気持ちが悪く感じそうになっている。

エ 宮多たちの会話に入れてもらえず、落ちこんでいたが、いつも自分をはげましてくれる祖母のことを思い出し、なんとか自分を奮い立たせようとしている。

問二 ——線部2「その顔を見た瞬間『ごめん』と口走っていた」とあるが、この時の「僕」の行動や気持ちの説明として
適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 一人でいても全くさびしそうにしていないう高杉の姿を見た瞬間、一人でいる人間はさびしいと決めつけていた自分の
浅はかさに気づき、グループ内の会話から抜けて高杉にわびる言葉がふとこぼれ出た。

イ 孤立していても堂々と落ち着いている高杉の姿が目に入った瞬間、孤立を恐れる今の自分を情けなく思う気持ちが急
に高まり、気づいたら会話の輪から抜けることを四人にわびる言葉を発していた。

ウ 自分に正直であることをつらぬいて一人である高杉の姿を見た瞬間、心をいつわり周りにうまく合わせている自分が
急にずるい人間に思えてきて、その罪悪感から高杉にわびる言葉が思わず口をついて出た。

エ 孤立を気にせず自分の趣味に没頭している高杉の姿が目に入った瞬間、そういう生き方こそが自分にはふさわしいと
思う気持ちが急にわき、四人にわびて会話の輪から抜ける言葉を感情のままに発していた。

問三 ——線部3「でももう、あとには引けない」とあるが、この時「僕」はどのようなことを思ったのか。次の中から適
当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分をあざ笑うような様子を見た四人のグループに対して、怒りをあらわにし、注目を集めてしまった以上、もう
二度とクラスのどのグループにも入れなくなるだろうと思った。

イ 自分にとって大切な刺繍を馬鹿にするような様子を見た四人のグループに対して、反抗的な態度で応じてしまった
以上、今後も刺繍についてからかわれることが続くだろうと思った。

ウ 自分を見下すような様子を見た四人のグループに対して、自分も相手を見下すような態度で応じた以上、お互いに
相手を軽蔑し、にくしみ合うことになるだろうと思った。

エ 自分をからかうような様子を見た四人のグループに対して、強い口調で反応し、クラスでも注目されてしまった以
上、もはやおだやかにこの場を収めることはできないだろうと思った。

問四 ——線部4「べつに。なあ。うん。彼らはもともと言い合い、視線を逸らす」とあるが、この時の「彼ら」の行動
や気持ちの説明として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 意外な反応にまごつきながらも強く言い返したところ、「僕」が食ってかかってきたため、そのことに動揺しつつも
それをごまかし、「僕」にこれ以上かかわることを避けている。

イ 本を読みながら手を動かす様子をからかっていたところ、「僕」が突然怒りだしたため、そのことにおどろきつつも
違和感を覚え、「僕」をさらに冷やかしてやろうとたくらんでいる。

ウ どうせ言い返せないと決めつけていたところ、「僕」が思わぬ形で反撃してきたため、そのことに腹を立てつつも恐
ろしく思い、「僕」の気迫にすっかり打ちのめされている。

エ 自分たちへの挑発に対して応戦したところ、「僕」が急にむきになりだしたため、そのことをおもしろがりつつも
まどいを感じ、「僕」とどう付き合っていけばよいのか迷っている。

問五 ——線部5「個性は大事、というようなことをうたぶんない」とあるが、そう思っている「僕」は、この時学校とい
う「場所」をどういう「場所」だと思っているか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 学校の中で受け入れられる程度の個性ならば皆に愛されるが、その範囲を越える個性を持っていると、たとえそ
れが世の中を見渡せば同様の個性の持ち主が多くいるようなものとしても、とたんに排除されてしまうような場所。

イ 学校の皆の価値観に合った個性ならばもてはやされるが、その価値観に合っていない個性を持っていると、たと
えそれが学校をより多様で豊かにするものとしても、とたんに変人として扱われてしまうような場所。

ウ 学校の皆が理解できる個性ならば受け入れられるが、理解できないような個性だと、たとえそれが社会に出たあ
と才能として開花する可能性を持ったものとしても、とたんに周りからその個性がつぶされてしまうような場所。

エ 学校の中で明らかに優秀だと認められる個性ならば尊敬されるが、その能力が中途半端だと、たとえそれが一
般社会においては当たり前前に尊重されるべきものとしても、とたんに否定的に扱われてしまうような場所。

問六 —— 線部 6 「ずんずんとくように見えた」とあるが、—— 線部 6 より前の部分で描かれた高杉くるみは、「僕」の目からどんな人物に見えていると考えられるか。次の中から適当でないものを二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 独特な感受性を持っていて、自分が興味を持つていくことにのめりこむところのある人物。
- イ 想像力があまりに豊かなため、日々の生活においても自分の空想の世界の中だけで生きている人物。
- ウ 自分の世界をしっかりと持っていて、時にそばにいる相手よりも興味の対象に心を奪われてしまうこともある人物。
- エ 自分を受け入れようとしめない人たちに対して、どう対応すればよいかをこれまでの経験から分かっている人物。
- オ 自分自身のこととはよく分かっているが、他人の気持ちを想像したり、気遣ったりすることはできない人物。
- カ 一人であることを恐れず、人に気に入られようとして周りの目を気にすることのない人物。

問七 —— 線部 7 「いつも、ひとりだった」とあるが、「僕」がこの時そう感じたのはなぜか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア たとえ友達のグループに入れても、会話についていくことができず、いつの間にか友達が自分から離れていったので、自分はいつも一人だったと気づいたから。
- イ 誰かと一緒に過ごしていた時も、あえて自分をいつわってまで友達を作ろうとしてこなかったので、自分はむしろ孤独であることを選んできたのだと気づいたから。
- ウ たとえ友達と一緒にいても、楽しいふりをしていなければならないとずっと意識しながら生きてきたので、結局は一人でいるのと同じだったという思いがわいたから。
- エ 誰かと一緒にいた時も、今になって気づいてみたら本当の気持ちを押し隠していることが多かったので、結局はいつも心の中は孤独だったという思いがわいたから。

問八 —— 線部 8 「文字を入力する指がひどく震える」とあるが、「文字を入力する」「僕」の「指がひどく震え」ていたのはなぜか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 宮多のグループにいられなくなってもよいと心に決め、本当は刺繍が好きだということをこの機会に思い切って宮多に伝えようとして気持ちが高ぶっているから。
- イ 宮多との関係が気まづくなって学校で孤立することになったとしても、刺繍が好きだという本当の思いを打ち明けようとして、不安や緊張を抱いているから。
- ウ ゲームに興味がなくなると打ち明けたら、今後は楽しいふりをせずにするが、優しくしてくれた宮多を裏切ることになり、怒らせてしまうことを恐れているから。
- エ 刺繍が好きな気持ちをこまかすことはできないので、趣味の合わない宮多たちと決別しようとしているが、これから宮多たちの態度がどう変わるか分からず、不安だから。

問九 —— 線部 9 「靴紐をきつく締め直して、歩く速度をはやめる」とあるが、この時の「僕」の心情はどのようなものか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア たとえ恥ずかしくても、自分が嫌いだっただゲームについて宮多に教えてもらい、あらためて仲間に入れてもらおうと決意するとともに、もしそれが自分の好みでなければ、好きなふりをせず本心を伝えようと自分を奮い立たせている。
- イ 刺繍を趣味とすることで友達がいなくなるとしても、それを恐れることなく、一人で生きていこうと決意するとともに、宮多たちを心のせまい人間だと決めつけていたことを恥じ、他者への理解も必要であることを実感している。
- ウ 多くの人には理解されなくても、刺繍が趣味であることを隠さず、好きなことを追い求めていこうと決意するとともに、自分も宮多たちとのかかわり方をあらためることで関係性を深めていくことができそうだという期待を抱いている。
- エ すぐには分かってももらえなくても、うまく縫えるよう努力を重ね、友達に刺繍のすばらしさを伝えようと決意するとともに、自分も宮多たちが好きなゲームを楽しむことで、明るい学校生活を送りたいという希望を持っている。

問十 〓線部「え、めっちゃうまいやん。松岡くんすごいな」とあるが、宮多のこの返信をきっかけにして、「僕」は自分のこれまでの生き方・姿勢についてこの後どのようなことに気づいていったのか。「僕」が得た気づきについて二つの内容にふれながら説明しなさい。なお、次の（ ）内に五〇字以上、七〇字以内の語句を補う形で書くこと。

「僕」は、（

）ことに気づいていった。

二、次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

最初に味わってみたいと思うのはメルケル首相が、今年三月十八日に行ったテレビ演説の言葉です。これからご紹介する一文は、皆さんもドイツ大使館のホームページで読むことができます。このダンワのはじめに彼女は、次のような、ある意味で意外なことを語ります。

何百万人もの方々が職場に行けず、お子さんたちは学校や保育園に通えず、劇場、映画館、店舗は閉まっています。なかでも最もつらいのはおそらく、これまで当たり前だった人と人の付き合いがなくなっていることでしょう。もちろん私たちの誰もが、このような状況では、今後どうなるのかと疑問や不安で頭がいっぱいになります。

一見何気ない言葉のように見えるかもしれませんが。しかし、あの日、先の見えない状況のなかで、この言葉を聞いた人たちには深い安堵が広がったと思うのです。彼女は国民を直接的にはげますのではなく、「不安」を共有しようとします。「誰もが」と前置きし、「疑問や不安で頭がいっぱい」だ、とメルケルがいうとき、もちろん、そこには彼女自身も含まれています。彼女は自分が抱えている不安を隠すことなく開示したのです。

この言葉はほどなく、日本語になって、インターネット上にも流れました。それを読んだときの感動を今も忘れることができます。メルケルが、決して口にしなかったのは「頑張れ」という言葉です。「皆さん、頑張りましょう」「私たちはどうにかかります。頑張りましょう」と彼女はいわない。彼女は「強さ」を誇るような態度を取りません。むしろ、「弱い」、「私たちは弱い存在なのだ」ということを最初に語るのです。

彼女は、自分の「弱さ」を明らかにすることで、本当の意味で、連帯というものが生まれてくることを経験的に知っているのだと思います。それは見方を変えれば、彼女自身がそうした弱さを正直に語る人をリーダーとして選んできたということもあるのだらうと思います。

3 コロナ禍は、リーダーのあるべき姿を根本から変えたように思います。世界のさまざまところで、いわゆる「メッキ」

がはがれるような現象が起こっています。これまでは「強い」リーダーが発言力を高めていました。

しかし、これからは、^②いたずらに「強がる」リーダーではなく、真の意味で「弱さ」を受け入れることのできる「弱い」リーダーこそが、人々と深いところでつながるのではないかと思うのです。

今日、メルケルの言葉にふれながら、アラタメテ考えてみたいのは、「つながり」という言葉です。この「つながる」という言葉は今、世界のさまざまな所で語られ始めています。(中略)

似た言葉で「交わり」という言葉もあります。⁴「つながり」と「交わり」がどのように違うのか、そして、この言葉の差異を繊細に感じ分けつつ、世界をどのようにつくり変えていかなければならないのか、ということを考えてみたいのです。

さて、メルケルは、先の言葉のあとに、多くの人が病に感染し、そして亡くなっていくなかで、人の「いのち」をめぐる語ります。

これは、単なる抽象的なトウケイ数値で済む話ではありません。ある人の父親であったり、祖父、母親、祖母、あるいはパートナーであったりする、実際の人間が関わってくる話なのです。そして、私たちの社会は、一つひとつの命、一人ひとりの人間が重みを持つ共同体なのです。

どの国でも感染者数は日々公表され、それを見た人々はさまざまな思いを胸に宿します。しかし、その一方で、人間の「いのち」は、けっして数量化されない何かでもあることも知っています。そして、「いのち」の次元では誰もが、尊敬を持った平等な存在であることもどこかで感じながら生きています。メルケルはそれに深い敬意を表すのです。

「敬意」は、リーダーとしてのメルケルを考えると、とても重要な言葉になるかもしれません。彼女はそれを直接語る、というよりもタイゲンしよう^dとします。

また、ここでメルケルが語っている「いのち」は、身体的な「生命」と深い関係がありながらも同じものではありません。「いのち」と「生命」は、どういう関係にあるのでしょうか。「生命」がなくなれば、「いのち」も消滅するのでしょうか。私たちの身体はしばしば目に見え、手でふれあえる、「交わり」を求めます。しかし目に見えない「つながり」を実現す

るのは、「生命」よりも「いのち」です。「いのち」と「いのち」がふれあったとき、私たちは「つながった」と感じるのではないのでしょうか。

また、日常生活で「交わり」のなかにいるとき、私たちはなるべく「弱さ」を隠そうとします。「強がる」ことが多いようにも思います。

そのいっぽうで、信頼できる人と「つながり」を感じるときは、安心して「弱く」あれるのではないのでしょうか。それだけでなく、弱いところを見せながらも、互いに助け合うということも起こる。人は、弱くあること⁵によって強く「つながる」ことが少なくないのです。

今——そしてかつても——この国ではどこから「頑張ろう」という耳には聞こえない「声」が響いてくるように私には感じられます。みんなでもっと「強く」あろうと励まし合っているように思うこともあります。

励まし合うのはよいことなのかもしれません。しかし、それよりも弱さを互いに受け入れることが最初ではないのでしょうか。

弱さと弱さが重なっても、より弱くなるだけなのではないか、という声もどこから聞こえてきそうです。「あたま」で考えるとそうなります。しかし、先にもふれたように私たちが、互いに内なる弱い人の姿で誰かに会う。そこには、信頼や友愛、ときには慰めがあり、あるときは孤立から救い出された心地もするかもしれません。

不思議なことなのですが、弱さによって実現した「つながり」は、私たちをより弱くするとは限らないのです。その人に眠っている可能性や生きるちからを呼び覚ますこともあるのです。

メルケルの話を聞いていると、彼女はこの「弱さの理法」といべきものをジュークチしているように思われてきたのです。メルケルはもとも物理学者でした。彼女は優れた合理的精神の持ち主です。その一方で、プロテスタントのキリスト者でもあります。彼女には「わたしの信仰」(新教出版社)という講演録があります。その一節を読みたいと思います。

人間はそもそも自分を愛し、自分を信じ、自分自身を理解していなければ他者を愛することもできません。

とても素朴な言葉ですが、たいへん重要な指摘なのではないでしょうか。他者を愛するために、最初に試みるべきは、自分を愛し、自分を信じ、自分を知ることだということです。

6 自分を知るとは、やはり、自分の中にある弱さを否むのではなく、愛しむことなのではないでしょうか。私たちは、自分の弱さを抱きしめられたときに、他の人の弱さもまた、拒むのではなく、抱きしめるに値するものであることに気がつくのだと思います。

(若松英輔「弱さのちから」)

問一 ――線部 a ~ e のカタカナを漢字に直しなさい。ただし、送りがなが必要な場合は、送りがなも含めて書くこと。

問二 ~~~~~線部①『メッキ』がはがれる・②「いたずらに」の意味として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。ただし、「メッキ」とは表面を金属の薄い膜でおおうことを意味している。

①『メッキ』がはがれる

ア これまで目立ってきた人物が注目されなくなる。

イ いままで隠されていた本性が明らかになる。

ウ これまで言ってきたことが全て嘘だと分かる。

エ いままで外部から守っていたものがなくなる。

②「いたずらに」

ア むやみに。

イ 悪ふざけで。

ウ 無理矢理に。

エ 表面的に。

問三 ――線部1「ある意味で意外なことを語ります」とあるが、なぜ「意外」なのか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分も不安をかかえていると隠さず表明して国民に救いを求めたから。

イ 現在混乱を極めている自国の危機的な状況についてありのままに伝えたから。

ウ 自分が現在感じている不安をそのまま正直に国民の前で表明したから。

エ 教育や経済の問題より人々のつながりが断絶する方が心配だと指摘したから。

問四 ――線部2「この言葉を聞いた人々には深い安堵が広がったと思うのです」とあるが、それはなぜか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 国民はリーダーのメルケルが強がらず弱い存在のままできると分かり、その様子から自分の強さを誇らないメルケルこそが新しい時代のリーダーとして優れているとつきり認識できたから。

イ 国民はメルケルが協力し合うことを求めていると理解し、それによって自分たち一人一人は弱い存在のままでも、力を合わせればこの困難を乗り越えることができると前向きになれたから。

ウ 国民はリーダーのメルケルが自分たちの不安を理解してくれていると分かり、だから今はまだ自分たちは弱いままでいてもよく、きつとメルケルが自分たちの不安を解消してくれると思えたから。

エ 国民はリーダーのメルケルでさえ自分たちと同じ弱い存在のだと理解し、それを知ること自分たちも弱い存在のままでもいいと強く、強い気持ちで困難に立ち向かわなくてもよいと思えたから。

問五 ——線部3「コロナ禍は、リーダーのあるべき姿を根本から変えたように思います」とあるが、それはどういうことか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア コロナ禍によって、リーダーにふさわしい人は、自分の強さを誇示して人々を一方的に引っ張る人ではなく、自分の心の中にある弱さを進んで見せることで社会の中に連帯を実現しようとする人になったということ。

イ コロナ禍によって、リーダーにふさわしい人は、頑張れという言葉を繰り返して人々から共感を得ようとする人ではなく、個人の不安に寄り添って社会全体に思いやりの気持ちを広めようとする人になったということ。

ウ コロナ禍によって、リーダーにふさわしい人は、解決困難な問題を前にして強がる態度を貫く人ではなく、問題解決の難しさを正直に訴えて国民と全ての情報をありのままに共有しようとする人になったということ。

エ コロナ禍によって、リーダーにふさわしい人は、単に自分の強さを演出して国民をまとめようとする人ではなく、国民に連帯することを命じながらも人々の弱さに対する共感を大切にする人になったということ。

問六 ——線部4「『つながり』と『交わり』がどのように違うのか」とあるが、筆者は「つながり」と「交わり」についてどのような違いがあると考えているか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「つながり」は、自分たちの弱さを見せ合って他者を理解することで、力強いリーダーシップを生むものである一方、「交わり」は力強いのは言葉だけで、危機に直面する世界を新たに作り変えることはできないものであるという違い。

イ 「つながり」は、自分たちの弱さを認め合うことで、他者との目に見えない深い結びつきを生む関わり方である一方、「交わり」は自分の弱さをさらすことができず、互いに強くあることを求める表面的な関わり方であるという違い。

ウ 「つながり」は、弱さを許容することで安心をもたらし、弱い立場の人を守るという社会的な結びつきである一方、「交わり」は強い存在になろうと互いに努力し励まし合うという、人間同士のきずなを深める結びつきであるという違い。

エ 「つながり」は弱さをさらけ出すことで弱者同士が連帯し、助け合っってより強い力を生み出そうとする関係性である一方、「交わり」は自分が他者よりも優位に立って生き延びようとする、強みを持つ者同士の関係性であるという違い。

問七 ——線部5「人は、弱くあることによって強く『つながる』とあるが、こうした「つながり」がその「つながり」の中にいる人にもたらすのはどのような経験か。そのことを説明した次の文の（ ）内に入る適当な語句を——線部5から本文の末尾までの間で、二五字以上、三〇字以内で抜き出し、始めと終わりの五字を答えなさい。

() 一般的な経験。

問八——線部6「自分を知る」について、次の【資料】を読んだうえで、次のページにある【条件】に従って、八〇字以上、一〇〇字以内で説明しなさい。

【資料】

今、世界は、未知なるウイルスの蔓延を契機とした、複合的な危機の渦中かちゅうにいる。

それは健康の回復という領域をはるかに超えたものにふくれあがっている。仮に明日、感染症しんじょうに劇的に効くワクチンが開発されても、パンデミックが問題を生んだ、と考えているうちは、本質的な解決には至るまい。

むしろ、危機は、これまで社会が、見て見ぬふりをしてきたものに起因する。見過ごしてきたもの、さらにいえば、ひた隠ししてきた、その最たるもの、それが「弱さ」だ。(中略)

二年前、大学の教員になった。学生と対話するなかで強く感じたのは、世にいう自己責任論の強さだった。それは無意識のレベルにまで浸透しんとうしている。いかに「強く」あるかは分かっている、自己と他者の「弱さ」の認識が難しいのである。

たとえば、科学は世の中にどう貢献こうけんできるか、というテーマで論議が始まる。話し合いは活発に行われるのだが、その視座はほとんど「助ける」側にあつて、「助けられる」側にはなかないかない。

もちろん、学生を責めることはできない。学生たちが進んでそうしたのではない。いつも誰かと競争し、他者に抜きに出るといふ社会の求めに応じた結果なのである。

「弱い」立場に立ってみなければ「弱い人」は見えてこない。さらにいえば「弱い人」の多くは、人の目の届かないところにいる。

(朝日新聞二〇二〇年四月三〇日付朝刊 若松英輔の寄稿による)

㊦ 抜きに出る…ここでは「抜きん出る」のこと。

【条件】

① 二文に分けて書き、一文目は「筆者は、〜と考えている。」という形で、二文目は、「それに対し、学生たちは〜。」という形で書くこと。

② 一文目では、筆者が「自分を知る」とはどのようなことだと考えているかを説明すること。

③ 二文目は、「資料」より、筆者が考える「自分を知る」ことに対する「学生」たちの現状はどのようなものかを読み取って説明すること。

二〇二一年度 一般入試① 国語解答用紙(2)

受験番号

氏名

	I
	II
	III
	IV
	V
	VI

◆右のらんには何も書かないこと。

小計

二

問 一	
d	a
e	b
	c

問 二
①
②

問 三

問 四

問 五

問 六

問 七
始め
)
終わり
よ う な 経 験 。

問 八				
100	80			